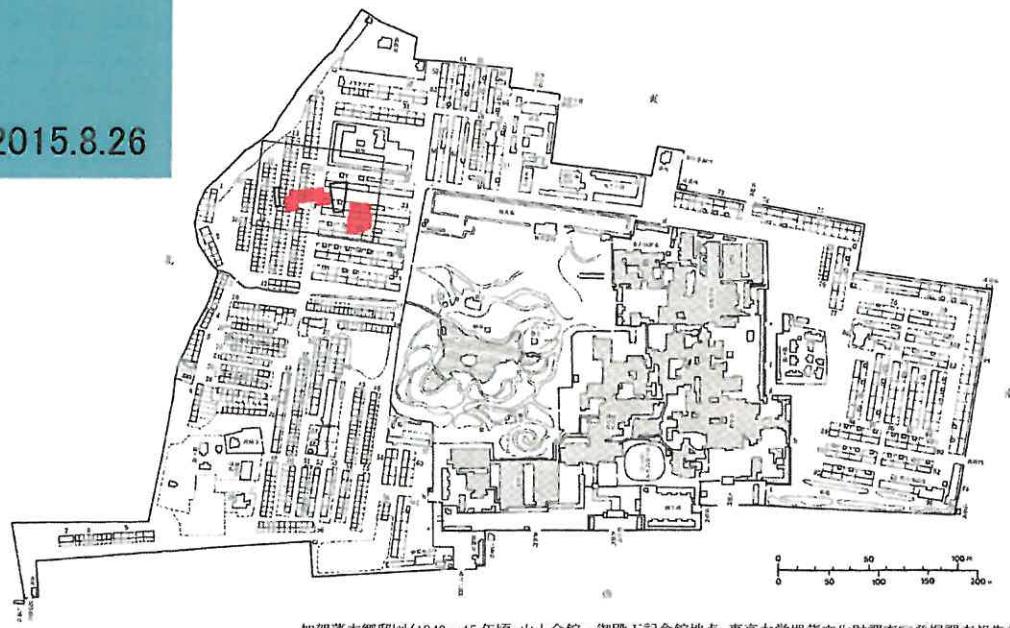


# No.1

2015.8.26

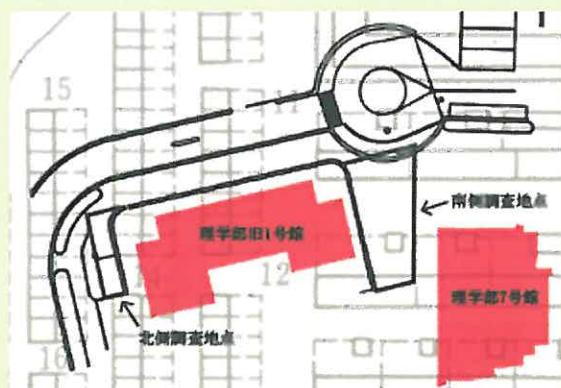
## 東京大学構内の遺跡

### 理学部1号館地点調査速報



加賀藩本郷邸図(1840~45年頃 山上会館・御殿下記念館地点 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4)

## やすじ ～江戸時代の集合住宅「八筋」長屋跡～



理学部1号館を含む東京大学本郷キャンパス一帯は、江戸時代の頃、加賀藩前田家の上屋敷でした。1985年に東京大学が理学部7号館建設地を発掘調査した際には、当時の建物跡や大量の陶磁器などが発掘されています。

この調査で特に注目されたのは、御貸小屋の発見でした。御貸小屋とは、藩が大名屋敷に勤める藩士のために用意した居住施設のことです。理学部7号館地点は、「武州本郷第図」(尊経閣文庫所蔵)等に記載されている八筋の三・四

番町に比定されています。同地点が描かれた絵図の数の豊富さも相まって、元禄時代から幕末までの長屋群の変遷が追えることができるのも、大きな特徴といえます。そして長屋建物の位置だけでなく、井戸や路地、廁の位置までもが詳細に記載されていることも重要です。なお、「八筋」の由来は8棟の長屋からきているようですが、時期が新しくなるにつれてその数が減少していくことがわかっています。

八筋長屋跡の重要性はそれだけにとどまりません。居住者の名前や禄高、役職、長屋の面積などが記載されていたことから、250~600石の禄高をもつ家臣が多く利用しており、またその中には、武士だけでなく、医師なども居住していたことが判明しています。

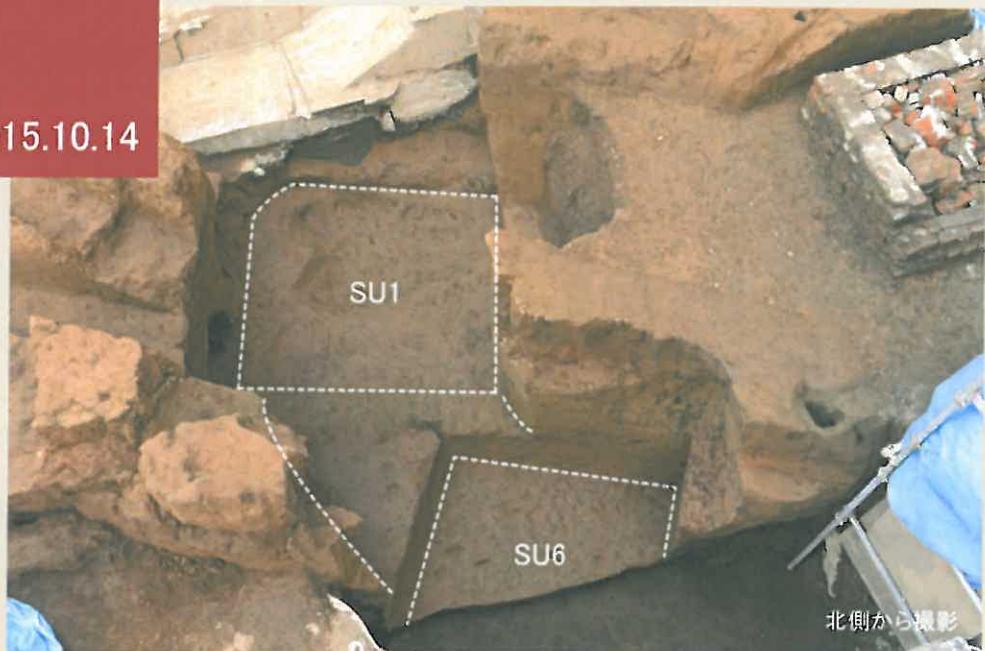
理学部1号館・南側調査地点も八筋長屋跡の範囲にあたるため、これらの遺構・遺物の発見が期待されます。

# No.2

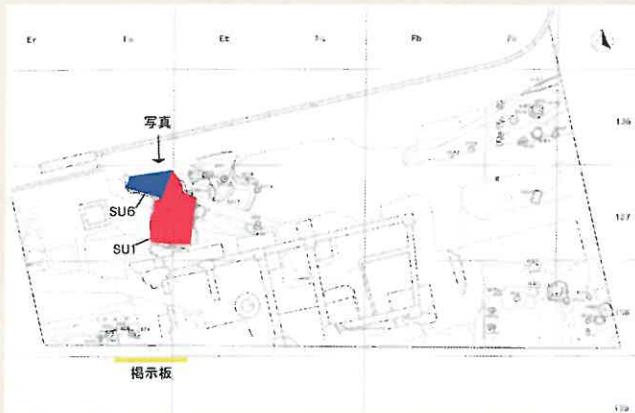
2015.10.14

## 東京大学構内の遺跡

## 理学部1号館地点調査速報



### ～火災から家財を守る「地下室」～



↑ 地下室上部の断面、下層の赤色の土が焼土

調査も佳境に入り、様々な遺構が発見されています。その中で今回ご紹介したいのは、2部屋からなる江戸時代の地下室(SU1・SU6)についてです。この地下室の規模は、比較的大型のものであり、南側のSU1が約 $2.8 \times 2.4m$ 、北側のSU6もこれとほぼ同じ規模であったと考えられます。またこの両者の間には、カーブを描いたような通路が設けられており、元は別に作られた部屋が、後になってから繋げられたと考えられます。

このような地下室は何のために使われていたのでしょうか。実はこうした地下室は火災の際に家財を地下室に避難させ、板や土をかぶせて火災から守るためのものであったことが分かっています。

このSU1・SU6の中には、焼けた土が厚く堆積し、それに伴って建物の礎石などが捨てられていました。こうした状況からSU1・SU6は、八筋長屋が全焼した幕末の火災を契機に廃絶したものと考えられます。

東京大学埋蔵文化財調査室

# No.3

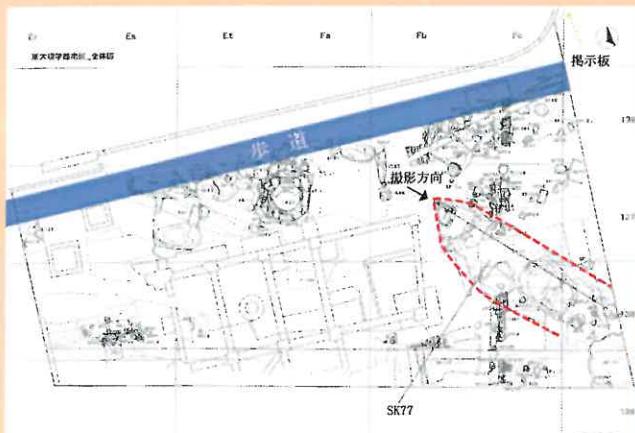
2015.11.30

## 東京大学構内の遺跡

## 理学部1号館地点調査速報



### きんばくかわら ～大名屋敷を飾った「金箔瓦」～

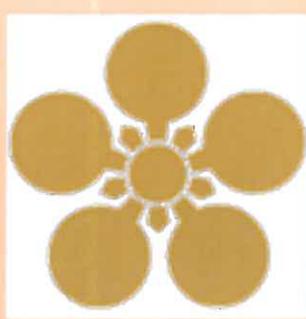


理学部旧1号館南区の東南側ではSK77という長さ10mを超える大型土坑が検出されています。このなかから江戸時代前半の遺物が多量に発見されましたが、特に注目されるのは金箔瓦の出土していることです。

この金箔瓦は大名屋敷の屋根を飾る家紋瓦で、加賀前田家をあらわす梅鉢文が施されています。諸説ありますが、前田利家が美濃に居住した頃、菅原道真公にあやかって用いたとも言われています。

この金箔瓦が八筋長屋より古い遺構であるSK77から出土したことにより、天和二(1682)年の火災まで使用されていたことがうかがえます。また、現状では金箔のほとんどが剥がれていますが、本来は金箔が瓦の梅鉢文様と周縁部を覆っていたと考えられます。こうしたことから、江戸時代前半の加賀藩邸は、金箔瓦を葺いたきらびやかな姿であったことを思い浮かべることができます。

東京大学埋蔵文化財調査室



↑梅鉢文の例

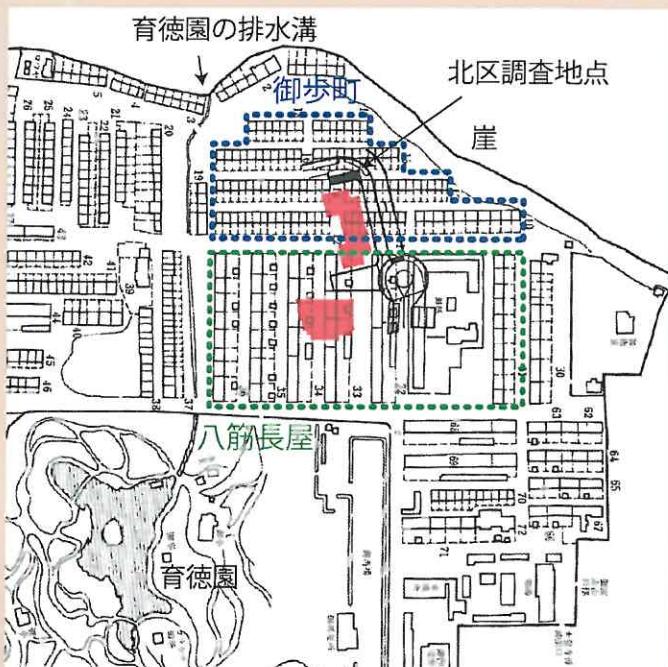
←金箔瓦が出土した大型土坑 SK77

# No.4

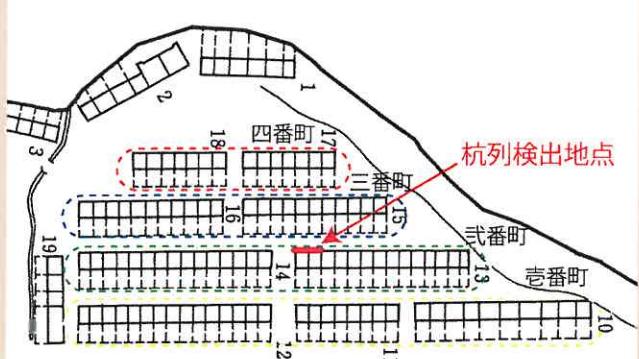
2015.12.4

## 東京大学構内の遺跡

## 理学部1号館地点調査速報



### おかげ ～御歩町の長屋を囲む「杭列」～



北区調査地点全景  
西から撮影

今回は北区調査地点の調査成果についてご紹介します。

南区では八筋長屋と呼ばれる中級家臣が生活した御貸小屋を調査したのに対して、北区では下級武士が暮らした御貸小屋を調査しました。絵図に御歩町壱、弐、三、四番町と記された長屋が南北に並んで描かれています。今回の調査地点は図に示した弐番町長屋にあたると考えられます。

今回の発掘調査では明確な建物跡は確認されていませんが、調査地点西側で東西に並ぶ杭列が発見されました。この杭列の主軸方向が、元禄元(1688)年の絵図、「武州本郷第邸図」などに記載されている長屋の主軸方向と共通していることから、この杭列は長屋の外周をめぐる柵列であったと考えられます。また杭列の北側では道路と考えられる砂利層が見つかりました。絵図でも長屋の北側には道路が東西に横断していたことがわかるため、杭列との関連性がうかがえます。